1

〝命さえ忘れなきゃ〟と気をつけていても、忘れるどころか逆に一方的に命を奪われてしまうということほど、理不尽で耐えがたいことはない。

自然災害で命を落とす場合も、唯一無二の命をなくすわけだから取り返しのつかない無念さに変わりはないが、人間がひき起こす行動によって自分が〝殺サレル〟という場面にだけは絶対に遭遇したくないと、きっとみんながみんな思うだろう。だれだって殺されるのはイヤに決まってる。

結構、バラエティに富んだ経験を数多くしているつもりの私だが、殺されそうになったことはないナ……と思いつつ記憶をたどっていくと、それに近い恐怖感を味わった経験の一つを思い出してしまった。

中学時代、私は美術部に入っていたのだが、そのときの美術教室でのワン・シーン。放課後、クラブの女子生徒四人ほどと、イーゼルを立て椅子に座り、静物のデッサンをしていたときだった。私の隣りで描いていたMが突然私に襲いかかってきた。そのとき二人で口論していたとか、ふだんから仲が悪かったとか、私が彼女をイジメていたとか……もっともらしい前提があったわけでは毛頭ない。彼女とはクラスも違い、絵を描くときだけの仲間の一人であったし、思いあたるフシはまったくといっていいほどなかった。

彼女は私を床にドーンと倒すとその上に馬乗りになり、すごい形相で両手を私の首にかけ、グイグイ絞めてきた。身の危険が迫っていることが前もってわかっていれば、身構えて対応することもできるが、無心に鉛筆を動かしていた私は無防備で、押し倒されても、彼女の手に力が加わり息苦しくなってきても、自分の身に何が起こったのか思考回路は止まったきり、……。

何が何ダカワカラナイうちに、意識が遠のきそうになってきた。彼女の顔がすぐ目の前にうっすらと見え、「殺サレル?!」と思った瞬間、猛烈に怖くなった。狂気を宿した彼女の切れ長の大きな眼に〝殺意〟がこめられているのを感じたからだ。

その後どういうプロセスでその場が収められたのか記憶はボヤけているが、たぶん周りに

いた友だちが助けてくれたのだろう。

それにしても、妙齢の女性になってから許されぬ恋の果てに、愛する男性が私の首に手をかけ……といった心中シーンならまだ絵になるかもしれないが（それもやっぱりゴメンこうむりたいナ）、袖とか、お尻部分がすれて光ったセーラー服姿におかっぱ頭の中学生の上に、同じいでたちの中学生が髪振り乱して乗っかって……というそんな姿のまま、もし私が絶命していたならサマにならないし、悲惨このうえない。

アレハ何カノ間違イ、幻ダッタノカモシレナイでかたづけるにはあまりにも生々しく衝撃的な事件だったのだが、それからあとも、そのことについてMに問いただすのはためらわれた。彼女が自分から触れるまで待とうと思ったのと同時に、感情の起伏がひときわ激しく、エキセントリックな彼女の精神のバランスが乱れたためだろうと思ったからだ。

私とMを含めた五人の美術部の仲間は、吸い寄せられるように集まっては絵をよく描いていたが、五人が五人ともそれぞれに鋭敏な感受性をもっており、危うさは五十歩百歩だったのかもしれない。ゴッホが耳を切り落とした〝狂気〟も理解できるような気がした。

とはいうものの、白地図に塗り忘れた部分を一つだけいつまでも残しているようで、いつか彼女に「あれは一体、何だったの？」と訊いてみなければと思いつづけてきた。こだわりのようなものもずっとあったと思う。

ようやくその疑問にケリがついたのはつい最近のことだ。この夏郷里に帰った折、美術教室での〝乱心〟が序章であったかのようにそれ以後、波乱に満ちた人生を送ってきたMと、あの場に居合わせた友人のNの三人で会う機会があった。そこで、唐突にNがこの話題を持ち出した。

「そういえば、中学のとき美術室でキョンナムに飛びかかって首を絞めたことがあったけど、どうしてあんなことをしたの？」

よくぞ訊いてくれた。私にとっても長年のミステリーなのだ。

ところが、Mはキョトンとした顔をして、

「えっ！　私がそんなひどいことをしたっけ」

と何にも憶えてない様子。大体、古今東西、被害者がいつまでも忘れないのに対して、加害者のほうはケロッと都合よく記憶を消し去ってしまうものである。そりゃないよ。

私が受けたあの恐怖をあがなってくれる答えを期待し、全神経を集中させてMの言葉を待っていた私は、見事に拍子抜けしてしまった。

Nの推測によると、Mのかなり危険なイライラの発作が、いちばんあたりやすい（車にあたられたこともあるが、私はなぜか人にもよくあたられる）私にぶつけられたのでは、ということだった。〝青春の嵐〟と名付けるには、あまりにも強烈過ぎる体験であった。

2

その中学生時代のワン・シーンとは別に、〝殺サレルカモシレナイ〟という、推理小説かドラマのなかでしか登場しない語句が、潜在的に私の体の奥深くインプットされていると書けば、「被害妄想じゃないの」とか「考え過ぎだよ」と一笑に付されてしまうだろうか。

人間がもつ感情、感性、感覚などは、さまざまな情報を浴び、経験を重ねるなかでできあがっていくもののようだ。

高校生のときだったと思う。目にした本の内容に慄然（りつぜん）とした。

〈――一九二三年に関東地方を襲った関東大震災の直後、「朝鮮人が暴動を企てている」「朝鮮人が井戸に毒を投げ入れた」……などのデマが乱れ飛び、軍隊、警察、自警団が朝鮮人とみるや片っぱしから殺し、その数は六千人とも一万人ともいわれている……〉

特にそのなかでショックを受けたのは、民衆と呼ばれるフツーの人たちまでもが竹ヤリ、木刀、とび口などを使って朝鮮人を殺していったという記述だった。

当時東京にいたという、もう亡くなった私の祖父も、このときの被害者予備軍の一人だった。血走った眼をして朝鮮人狩りをしている男たちに、もうすこしのところで捕まりそうになり、マンホールから下水道を通って逃げ切った、という話を父から聞かされたことがある。そこで運悪く祖父が犠牲者の一人になっていたら、私は当然生まれてこなかったわけだ。

（ただ朝鮮人であるということだけで、それだけの理由で殺された）

一六、七歳だった私は、自分の立っている地面から土が崩れ、地の底へつき落とされたような恐怖感をおぼえた。その〝恐れ〟は、いまでも体内深く刻印されているようである。

以前、ラジオの自分のコーナーでも語ったことだが、友だち（日本人）を前にして、（この人は、もし関東大震災のときと同じような状況になった場合、私をちゃんと守ってくれるだろうか）

と、一度はこのフィルターを通して判断しようとするクセがある。

一般常識とか、親切、善意、理性ある行動などは、自分の身の安全が守られていたり、また、そうできる充分なゆとりがあるときにフツーは発揮される場合が多い。人間はふだんの言葉とか行動ではなく、極限状態におかれたときにどう反応するかによって、その人の本当の価値が測られるような気がするのだ。

一九二三年（大正一二年）九月一日、関東地方は朝から強風をともなった雨が降っていたが、午前一〇時ごろには荒れ模様の天気も落ち着き、夏の日ざしが照り出した。人々が昼食をとるためひと息つこうとする直前の一一時五八分、関東地方を震度六、マグニチュード七・九の激震が襲った。食事のしたくで火を使っていたことから、またたくまに東京、横浜などが大火災に見舞われ、死者約九万人、家屋全壊焼失約五〇万戸という大被害をもたらした。

人々が混乱と恐怖の放心状態におちいっているなかを、なんとも素早く、デマが走りはじめた。

まず、地震直後の九月一日の午後、〝流言〟が関東各地の警察署内で飛び交った。

〈朝鮮人が井戸へ毒を投げ入れたり、放火、強盗をやって暴れ出している……〉

駐在所の前に『朝鮮人暴動』の貼り紙が出され、メガホンでふれまわったり印刷物を配る警察官もいたという。さらに三日早朝には、内務省警保局長名で、

〈朝鮮人の中には東京市内において爆弾を所有し、石油を注ぎ放火する者あり〉

という電文が全国の地方長官宛に打電され、関東地域の市町村にも通達が下されていった。

その電文がデマであったことは、後日はっきりする。

〈……爆弾と思えるものはパイナップルの缶詰にして、毒薬と考えしものは砂糖なるを知れり〉

なんのこともない、バカバカしさだ。しかし意識的に流され、広がりはじめた〝流言飛語〟は、自分の身に余裕のない人々の間に大変な勢いで浸透していったのである。

話は前後するが、いまから一年ほど前、東京の日本橋に住む九〇歳の女性に仕事でインタビューをしていたら、そのときのデマの話が飛び出してきてギョッとしたことがある。

「大震災でこの辺一帯は全部丸焼けになって日比谷公園に逃げました。そしたら朝鮮人が暴れ出したから海城中学に行けと言われ、みんな右往左往しましてね。

えっ？　暴れているところを見たことがあるかですって。いいえ、一度もないです。ふだ

ん朝鮮の人たちをイジメていたので、恐くて誰かがそう言い出したんじゃないですか。

それからしばらくして、朝鮮人が井戸に毒を投げたという話を、私の父が働いていた新宿御苑のほうから聞いたんですよ。それで父親が御苑の中の井戸水を汲んで調べたそうなんですが、毒は入ってなかったみたいです。

ですから、うわさというのは自分で確かめなきゃいけないということを、そのときつくづく思いましたね……」

なるほど、そのとおりである。しかし、うわさが乱れ飛んでいる最中は、彼女のように知恵も賢さも十二分に身についている人でも迷わされるものなのだと、改めてうわさの恐さを実感させられた。

いったい、根も葉もないデマは何の目的のため、どこから発生して、どのように広がっていったのだろう。

では、まず、「流言」の発生元に警察が関わり、警察、軍隊の通信網を通じてそれが流されていったというのはどういうことなのだろうか。

一九一〇年に日本は朝鮮を植民地にしたが、そのあまりにもひどいやり方に対して朝鮮の

民衆は、一九一九年三月一日、独立を目ざす運動（三・一独立運動）を全国的な規模で巻き起こした。日本の統治者たちはその抵抗の強さに衝撃を受けたといわれる。

震災当時、日本には約八万人から九万人（東京で約一万二、三千人、神奈川に約三千人）の朝鮮人たちがいたというが、その背景には、土地を奪われ生活できなくなった人々が日本へ渡ってくるしかなかったという現実があった。彼らは日本人の嫌う危険、汚い、きついのいわゆる三Kの上に「超」をつけた仕事をやらされ、同じ労働でも、賃金は日本人の半額にも満たないという境遇におかれていた。

ちょうど大震災の起きる一年前には、長野県の信濃川発電所工事場で、あまりの非道さに抗議の声をあげている。そのとき、そこで約一〇〇名近い朝鮮の労働者たちが殺されるという事件があり、このままではいけないと、朝鮮人労働者たちが組合を作って日本の労働者たちとの連けいをはかろうとする動きが生まれていたところだった。

時の内務大臣の水野錬太郎、警視総監の赤池濃は、三・一独立運動を抑えつけた朝鮮総督府の政務総監と警察局長をやっていた人物である。赤池氏は、富山県の魚津で一九一八年に始まった「米騒動」の体験から、大衆が騒いで秩序を乱してしまうことを特に恐れていたという。

パニック状態のなかでは、人々のエネルギーがどこへ向かって暴発するかわからない。それをすべて朝鮮人へ向けさせたいという意図と、植民地支配している朝鮮人に対する警戒心、労働運動が広がることへの危機感などが、〝流言〟を生み出したということなのだろうか。

震災直後、治安を守るためとして軍隊が出動、九月二日には戒厳令がしかれた。〝戒厳令〟と言われてもピンとこないかもしれないが、軍が行政権、司法権を握って命令を下すことである。日本は明治憲法下でこの制度があったのだ。

その戒厳令下、軍隊、警察、そして在郷軍人会、青年団、消防隊などによって各地に組織された自警団が中心となり、〝朝鮮人の大量殺害〟が行なわれた。

当時、その渦中にいた人たちの証言集（『関東大震災朝鮮人虐殺』裵昭（ペエッ）著　影書房刊）を読むと、あまりの残酷さに字を追うのがつらくなる。

坂井松吉さん（八五歳）は次のように語っている。

「九月二日に軍隊一個中隊が来て朝鮮人を堤防に並べ、後ろから機関銃で射殺したのを覚えています。青年団の役員から朝鮮人の死体処理作業を手伝えと言われ、穴掘りや死体に石油をかけたり、穴を埋める作業を手伝ったんです。河川敷三ヵ所に百体くらいあったと思いま

すよ」

軍隊、警察だけではなく、自警団の〝殺し方〟は日本刀、竹ヤリ、木刀、とび口で、朝鮮人と見なすやウムを言わさず殺すという残虐きわまりないものだった。

八三歳でいまは故人となられた曹仁承（ソウインスン）さんは、そのとき九死に一生を得た。

「九月二日、寺島警察に連れていかれる途中、目の前で同郷の三人がハッピ姿の消防隊に虐殺されたのよ。縛られていた私は、荒川の橋上の屍体の山から兄とそっくりな屍体を見つけ、縄をふりほどいて飛びついたところを消防隊のとび口で左足をひっかけられてしまってね。（曹さんは亡くなるまでその不自由な足をひきずって生きておられたそうだ）

女も子どももあったもんじゃないんだ。もう台所から出刃包丁をもって飛び出してきてウリ（私たち）を突こうとしているんだから。こんなことってないさ！……」

一〇歳の少年だった高橋義雄さん（七五歳）は、コークスの炎の中に、針金で縛られた男の人を数人の日本人が投げこんでいた光景を思い出して絵に再現している。

どういうふうにして朝鮮人と日本人を見分けたかというと、「十五円五十銭」と発音させるのが多かったが（朝鮮語は最初の音は濁って発音しない。したがって「ちゅうごえん、こじゅっせん」という音になってしまう）、歴代天皇の名前、教育勅語を暗誦させたりもした

ようだ。誤って殺されそうになった日本人もたくさんいた。まったく狂気の沙汰としか言いようがない。

軍から各村、集落へ朝鮮人たちが払い下げられたという記録も残っている。

君塚國治さん（八七歳）の話もショックだ。

「軍隊から、朝鮮人をくれるから取りにこいと連絡が各村にあったもんで、上・下の村の警防団が三人ずつ、殺すのにもらってきた。朝鮮（当人）の要求でもって鉄砲で撃ってくれと言うもんだから、酒飲ませ観念させて目隠しして竹の棒に縛ってさ、そしたらおまえやれとか、そっちがやれとかで、やっと従兄が撃ち殺したんだよ」

一九八二年から東京・墨田区の荒川河川敷で、朝鮮人犠牲者の遺骨発掘作業が市民の手で進められているが、殺される側にいた私の同胞たちにとって、どれだけ無念で、くやしくて怖かったことだろうかと思う。私が中学生のとき、首を絞められた恐怖など比較にもならない。

最近テレビでよく〝霊〟の話が取り上げられ、私も夢中になって見入ってしまうクチなのだが、霊能者によると、ひどい死に方をした霊、恨みをもって死んだ霊は成仏できないでタ

タルとか、浮遊しているという。それならば、異国で不当に殺された朝鮮人だけでなく、東京大空襲にしても、沖縄の地上戦で自決していった人たちにしてもタタらなければおかしいと思うのだが、彼らの無数の怨念はどうなっているのだろう。

関東大震災時の朝鮮人たちの無残な死に方を知るにつけ、霊視の達人である宜保愛子さんにぜひ一度、尋ねてみたいと思ってしまうのだ。

父が昔、酒を飲みながらしみじみ言っていた言葉が強く甦ってくる。

「日本に盗られて朝鮮という国がなかった時代、それはもう惨めなものだった。日本人に殴られてもどんなにひどい目にあっても、タテつくことができない。殴り返そうものならブタ箱に入れられてしまう。情けないが向こうにされるがままだった。国がなかったんだもんな。国をなくした民族がどれほど悲惨なものか骨身にしみて知っている。

でもいまは違う。二つに分かれているといっても祖国が、立派な国があるんだから、どれだけ心強いか……」

自分たちを守ってくれる母国が地図の上から消え、それが原因となって奪った側の国へ働きに来ざるを得なくなり、そこでひどい殺され方をしてしまう。そりゃ、いくら何でもあんまりだヨと思えてならない。

あんまりだヨと言えば、仕事の打ち合わせであった二十代半ばの女性編集者と雑談をしていたときのことだ。

たまたま話の流れでこのときの話をしたら、彼女は少しバツの悪そうな顔でこう言った。

「えっ、そんなひどいことがあったんですか。ちっとも知らなかった……」

そうだろうナ。自分で意識して知ろうとしないと、そういうことって、なかなか表に出てこないもんね。そういえば、何年か前、ある女の子（と言っても二十歳）から、日本の朝鮮へ対する植民地支配の歴史を私をとおして初めて知ったと言われ、ビックリしたこともあった。

そういうものかもしれないナ。私の首を絞めたMではないが、やったほうは記憶装置を止め、忘却のボタンを簡単に押してしまうのだろうが、された側はそれだからこそ余計に、記憶をよび醒まさせ、事実をはっきりさせていきたいと思うんだよね。

デマを流し自警団結成を促した治安当局も、これはやり過ぎだと思ったのか、九月三日からは殺害を抑制する（という表現も、考えたらスゴイことだナ）処置を取りはじめた。

〈鮮人の大部分は順良にしてなんら凶行を演ずる者なきにつき、みだりにこれを迫害し、暴

行を加うるなどなきよう注意せられたく……〉

警察署でも朝鮮人の保護をはかるところもあった。九月四日、埼玉県の本庄署の場合、村磯署長やその他の警察官は虐殺を止めようとしたが、群衆に石や薪を投げつけられて負傷する者が続出した。本庄警察署は襲撃され、そこに収容されていた朝鮮人たちは殺されてしまったという。しかも六日には、群衆が「朝鮮人をかばった村磯の首を斬れ」と再び本庄署を襲い、放火しようとしたところを軍隊に制止されている。

また、群馬県藤岡署にも五日、藤岡の自警団がおしかけて署内にいた朝鮮人一六名を殺し、六日には警察署と署長官舎に乱入して器物を壊した。

一度熱狂すると人間は歯止めがきかなくなるのだろうか。一般大衆と呼ばれるフツーの人たちが集団となって理性を失ってしまうことほど恐いことはない。

比べるのはヘンかもしれないが、お祭りでミコシを担いだ人たちのほとばしる熱気に内心後ずさりして震えてしまうことがある。

同じように町内会の消防団に対しても、時代と状況が全然違うというのに、コワサをどこかしら感じてしまう。〝虐殺〟を実際には体験していないのに、親子の代を継いだ〝原体験〟として私の心のどこかに恐怖が棲みついているのだろうか。

関東大震災があった一九二三年九月一日の夜中過ぎ、東の空には半月になる二日前の月が上がった。天地異変を投影したのか、不気味なほど赤い月だったという。そして朝鮮人のたくさんの死体が積み重ねられた三日には、下弦の月が出ていた。規則正しい満ち欠けを繰り返す月の下で、人間はなんと恥ずかしく愚かな狂気を演じてしまうのだろう。

3

ところが、である。そんな関東大震災時の陰惨な狂気が支配したなかで、引き渡しを迫る群衆から三〇〇人もの朝鮮人たちを命を張って守り抜いた人がいる、という話を聞いた。

救いようのない暗黒の闇のなかで、ひとすじの光を感じさせてくれる話である。絶望が深いからこそ、希望はしっかり伝えたい。

その人、大川常吉さんの存在を知ったのは、春というにはまだ寒さが居座っている、雨まじりの風が強く吹く三月のことだった。

日本で生活する在日韓国・朝鮮人をテーマにした、あるテレビ番組の取材で、神奈川県川崎市にある桜本保育園というところを訪ねた。五〇年前、一六歳で来日し、三二年間この地

域に根を下ろして活動されている李仁夏（イインハ）牧師に会うのが目的だった。

川崎市の桜本は日本鋼管（現ＮＫＫ）があったため、日本の植民地時代に労働力として朝鮮から連れてこられた人たちが、いまなお多く暮らしている町である。桜本の近く池上町の路地を歩いてみると、細く入り組んだ道に沿って家が密集しており、迷路にまぎれこんだような感じを抱く。いまだに下水溝ひとつ整備されず、戦後四六年間首都圏のエア・ポケットのように放置されたままという話に、世界一の金持ちになった日本が厚化粧を落とすと、シミにくすんだスッピン顔がニョキッと出てきてコンニチワ、といった連想が浮んできてしまう。

李先生は川崎教会を開放し、一九六九年、地域の子どもたちをあずかる保育所を開設した。日本人と在日韓国・朝鮮人の子どもたちが三対二の割合というが、保育園の中をのぞくと、壁にはハングル文字で、アンニョンハシムニカ（こんにちは）や簡単な会話が書かれた紙が貼ってあり、目が吸いよせられる。

突然の訪問者である私たちのために、その部屋にいた一二、三人ほどの園児たちが韓国の歌を合唱してくれた。在日の子だけでなく、日本の園児たちも声をそろえて一緒に韓国語で歌っている様子には、胸を熱くさせるものがある。日本の子どもたちがハングルを使ってい

る情景を見るのは初めてだった。
李先生は次のような説明を加えてくれた。
「お互いがそれぞれの民族の文化に触れながら共に生きる、〝共生〟をモットーにやっているんです」
細身でスラッとした長身の李先生。眼鏡越しの柔和で優しい眼差しと、包みこんでくれるような微笑みに、イソップ童話を思い出した。風がいくら強く吹いても脱ごうとしなかったマントを、ポカポカした太陽が現われた途端、旅人はすんなり脱いでしまうという物語である。
李先生は、当初、保育園の設立・運営などにも反対の立場をとっていた地域の商店主、自治会役員、近隣の学校のＰＴＡ会長たちと、決して諦めずに時間をかけて粘り強く対話をしつづけたそうだ。
その結果、いまでは地域の人たちの理解も得られ、なかでもいちばん反対していた銭湯のオヤジさんは、娘さんの結婚式に李先生を招待までしてくれたという。
人々がもつ偏見、偏狭な心を変えていくのにいちばん説得力があるのは、一体何なんだろうと常々考える。抗議行動を起こすことも、ちゃんと相手をキュウダンすることも必要であ

るとは思うが、結局のところ必要かつ大切なのは、〝正しいこと〟を言う側の誠実な人間性なのだと、李先生と接していると思えてくる。
その李先生が、長く地味な人権のための活動の歴史を語ってくれながら、
「そう、そう、こんないい話があるんですよ。ぜひ聞いてください」
というすべり出しではじまったのが、大川常吉さんの話だった。

震災当時、大川さんは横浜市の鶴見警察署の署長の職にあった。『神奈川県警察史　上巻』の史料からそのときの状況を再現してみよう。
〈……その後、自警団や一般の人たちに引きずられながら続々と朝鮮人が連行されてきた。なかには泣きながら警察へ救いを求めにくる者もいた。署長はこれら朝鮮人を一時、総持寺境内に収容し、巡査を派遣して警戒にあたらせ保護の万全を期した。
三日になると、朝鮮人に対する敵がい心は異常なまでに高まり、『見つけしだい打ち殺せ』と言われるほどになった。地元有力者でさえ再三にわたって『一刻も早く総持寺に保護している朝鮮人を放逐してもらいたい』と要求が出される始末であった。
しかし署長は、適正な判断にもとづく信念をまげなかった。……保護の万全をはかるため

総持寺境内に保護中の朝鮮人を全部警察署に移した。

これを知った民衆は、『朝鮮人を殺せ』と叫びながら警察署に押しかけた。……群衆はいつの間にか千人をこえていた。彼らは警察署を包囲し、『朝鮮人に味方する警察などたたきつぶせ』と叫びながら、暴徒化の気配を色濃くただよわせはじめた。

いまはこれまでと覚悟を決めた署長は、

『よし、君らがそれまでにこの大川を信頼せず、言うことをきかないのなら、もはや是非もない。朝鮮人を殺す前にまずこの大川を殺せ』

と大喝し、群衆の前に大手を広げて立ちふさがった。身命を賭けたこの大川署長の態度に、猛りたっていた群衆も威圧されてようやく鳴りをひそめた。……〉

この後九月九日、収容していた三〇一名全員を汽船「華山丸」に移し、一部を神戸に送るなどして事なきを得た、と史料は結んである。

当時、鶴見で職工をしていた門司亮さん（後に民社党の衆議院議員）の著書のなかにも〝朝鮮人守った署長〟という見出しでこのときのことが書かれている。大川さんは、群衆にこうも言ったそうだ。

「朝鮮人が毒を投入した井戸の水をもってこい。私が先に諸君の前で飲むから。そして異状があれば朝鮮人は諸君に引き渡す。異状がなければ私にあずけよ！」

門司さんは文中で、この大川さんの態度に接して感じたことを次のように綴る。

「……人命の尊厳を知り、法と秩序を守り通した大川常吉署長の決断と行動を身近に見て、何か社会的に大きな示唆を与えられたような気がしました。これは私がその後、社会主義者として社会運動をする上に大きな教訓となりました」（『私の人生』門司亮著より）

このときの様子を詳しく知りたくて、九四歳になられるという門司さんの自宅を訪ねた。JR鶴見駅から鶴見川を越え、一〇分ほど歩くと、路地を入った奥に古い平屋建ての家がひっそりとした感じであった。

四歳年下の夫人と二人暮らしの門司さんは、体調がすぐれず床についておられたが、私の来訪に、布団に座わると背筋をシャンと伸ばして、質問に答えてくださった。

記憶力は抜群で、口調もよどみなくはっきりしている。労働運動の闘士として、市会議員、県会議員、そして国会議員を二六年間やってこられた門司さんの、気骨と精神力がいまだに衰えていないことに感心してしまった。

――大川さんを知ったのは……。

「震災のとき、私は二六歳で鶴見の浅野製鉄所という会社の職工をやってたのね。大川さんは鶴見の警察署長をしていて、よく会うことがあったよ」

――どういう印象の方でしたか。

「本当におとなしい人でね。警察の署長をしているような感じの人ではなくて、温厚な人だった。

私がよく憶えているのは、私が市会議員に立候補したとき、応援演説に労働組合運動の元祖と言われている鈴木文治さんが来てくれたんですよ。大川さんも鈴木さんが来るっていうんで、私服で仕事を離れて聴きにきてたらしい。

そのときに鈴木さんの演説を、サーベルをもったおまわりさんが『中止！』とやったんですよ。その当時はそういうことがよくあったの。そしたら鈴木さんが怒って、おまわりとほとんどとっくみ合いのケンカになりそうになって……。

そこへ大川さんが来て、『鈴木クン、もうやめなさいよ』と静かに言ったら、鈴木さんは『やあ、なんだ、君か。君がここの署長か。じゃあ、僕はもうやめるから』って次の応援演説会場に行ったんですよ。大川さんと鈴木さんは個人的につきあいがあって、信頼関係があったんでしょうね」

――穏やかな人という印象を受けますが、関東大震災の混乱のなか、朝鮮人を守った姿勢には、人間として芯の強さがありますね。

「そうだね、朝鮮人は見つけしだい殺していたなかで、大川さんはしっかりした人だった。よほどの勇気と決断がないと、あんなふうにはできないよ。

あのどさくさのときにも落ち着いててね。『朝鮮人はオレが守るから』って、お寺の本堂にみんな集めたんだよ。

私も震災直後、裸で歩いていた朝鮮の男に、そのままじゃ日本人にやられるぞと、自分が着てた着物をやったんだけど、行ってみたら彼もそのお寺にいたよ。

そこも危なくなったからって大川さんが自分で迎えにいって、全員を警察署の二階の柔道練習場に入れてね。じつに見上げた男でしたよ。

『朝鮮人を出せ』と、群衆が警察署を取り囲んだときも、群衆を向こうにまわして『毒はオレが飲むから』って毅然としてたね」

――あの時代、日本人の朝鮮人に対しての差別意識は大変強かったと思うんですが、大川さんはなぜ、命をかけてまで朝鮮人たちを守ろうとしたんでしょう。

「どこの国の人間だろうと、人の生命に変わりはない、と。人の命を守るのがオレの仕事、

任務だと言ってたからね。そりゃあ、よくできた男だった」

――助けられた人たちは、全員無事だったんですか。

「そう、警察に何日間か保護して、住民の救済用に使った船に乗せ、神戸とかに送ったみたいだね。

大川さんがいなけりゃ、みんな殺されてたよ。ハリガネで縛って竹ヤリで殺したりしてたんだから。震災のあと、会社に行ったら会社の前に死体がいっぱい積んであった……」

――助けられた朝鮮人たちが大川さんの碑を作ったそうですね。

「そう、朝鮮の人たちが恩を忘れずにね、大川さんの墓の前に、小さいけれど在日朝鮮人の名で感謝の碑を建てたの。

小学生の子どもたちがウチの家に、よく訊きにきますよ。『大川さんの墓はどこにあるの、教えて』って。

もう少しね、世間の人にこういう人がいたということを知ってほしいと思うね……」

その石碑は、横浜市鶴見区潮田町三丁目の東漸寺（とうぜんじ）にあるとのことだった。

六月半ばのある日、梅雨のくもり空の下、鶴見駅から歩いて二〇分ほどの東漸寺を訪ねた。

幼稚園が隣接する境内の、墓地の入口を入ってすぐ左側に大川家の墓があった。その前に、ブロック塀に囲まれるようにして石造りの碑が建っている。一メートルちょっとの小さなものだが、刻みこまれた一字一字から伝わってくるものはズッシリと重い。

碑文には次のように記されていた。

故大川常吉氏之碑

関東大震災当時、流言飛語により激昂した一部暴民が鶴見に住む朝鮮人を虐殺しようとする危機に際し、当時鶴見警察署長故大川常吉氏は、死を賭してその非を強く戒め、三〇〇余名の生命を救護したことは誠に美徳である故、私達は茲（ここ）に故人の冥福を祈り、其の徳を永久に讃揚する。

一九五三年三月二一日

在日朝鮮統一民主戦線

鶴見委員会

大川常吉さんは一八七七年（明治一〇年）に生まれ、震災時は四六歳。一九四〇年（昭和一

五年）に六三歳で亡くなられた。この碑は大川氏没後一二年、朝鮮が一九四五年に解放されて七年後に作られたことになる。

人間の非道さ、愚かさには限りがない。それは確かにイヤになるほどどうしようもなくあるし、目をそらせても知らんぷりしてもいけないものだろう。

しかし、それでもなお、あの歪められた無惨きわまりない日本と朝鮮の関係のなかで、こういう碑が生まれたことは、人間への信頼感を繋ぎ、蘇らせてくれるもののように思えるのだ。

狂気と朝鮮人蔑視がすみずみまで浸み渡っている状況下で、大川さんがああいう行動をとれたのはどうしてだったのだろう、という思いが強くなってくる。あの当時の日本人の中に、めずらしい人がいたからという特異性にではなく、どんな状況下においても、狂わない座標軸を持てる人間性に興味と魅力を感じるからだ。そして私自身も、そういう座標軸がほしいと思う。

横浜に健在でおられる大川さんの息子さんの父親像は、ただ厳格で口数の少ない、恐い存在のお父さんだったということしかないそうだ。

物事を客観的に、必要な距離感をもって視られる人であったことは間違いない。特に人は、

パニック下では理性が吹っ飛ぶことが多く、そういうときに冷静に行動できるかどうかは大切なことである。

智恵にも感心する。「井戸に毒を投げたから渡せ」という言葉に対して、「その毒の入った水を自分が飲む。それで自分が死ねば朝鮮人を連れてけ」と、デマを見事につぶしてしまう賢さには感嘆してしまう。

勇気もある。千人もの猛り狂った人間を前にしてひるまないはずはないのに、気迫をもって対決するところなど誰にでもできることではない。

責任感も強かった。人命を守るのが仕事だと言いきり、自分の命を張ってまで任務を果たしたわけだから。

自分の国さえ、国民さえよければいいという偏狭なナショナリズムからも遠い人だった。

こうして見てくると、「スゴイ！」と感嘆符をつけたくなるところはたくさんある。でも、それらのことをすべて包含してなお余りあるほど大川さんに私がいちばん強く心を動かされたのは、〝殺される側〟の立場に立てるというところである。

〝殺サレル〟のがイヤなのは自分だけではない。他の命を自分の命と同じように、かけがえのない貴重なものとして受け止められる感性こそが、人が身につけるべきいちばん基本的で

大切なものではなかろうか。
人には最低限ギリギリの守るべきものがあるように思える。それは人間としての「尊厳」「品性」「誇り」といったもので、時代も国境も民族も超える普遍的なものであることを、大川さんが身をもって示してくれた……。

4

ところで、一般には知られていない震災時の大川さんをめぐるこれらのエピソードは、地域の小学校の歴史の教材として、きちんと取り上げられていた。
門司さんの話のなかで、小学生が大川さんの墓の場所を尋ねに来るという話があったが、鶴見区の矢上小学校の山本スミ子先生が、社会科の学習に、「関東大震災と朝鮮人虐殺」を取り上げたからである。その授業で書かれた生徒の感想文を読ませてもらったが、子どもたちの視点の確かさに、思わずうなった。
「今日、大川常吉さんのお墓と石碑を見に行った。この人は朝鮮人がデマを言われて苦しんでいたとき、勇気を出して助けた人です。えらいと思います。すごいと思います。こんな人

がいたのに、なぜほかの人はそんなくだらないデマを信じたんだろう。
日本人がかってに朝鮮をどろぼうして、本当は来たくもなかった日本に来てまで、昔のことやいまのことをふくめて、なぜ日本人は朝鮮人をいじめなければいけなかったんでしょうか。そのいじめ方もひどすぎます。
いつでもどこでもほとんどよいことが認められず、悪いことが進んでしまいます。悪いことはとてもかんたんにできます。でも、よいことはとてもむずかしいことだと思います。私達が大人になったら、平和な世界になればいいと思います」
「私はいま大事なことを一つ勉強しました。それは日本人は戦争以外でも、朝鮮人を差別して殺してしまったことです。朝鮮人はなにもしていないのに殺してしまうのは、ぜったいにいけないと思います。
でも私は『かわいそう』とは言いません。それは『かわいそう』という言葉は、その人よりすぐれた人が上から下を見おろすように言う言葉だからです。私は朝鮮人よりすぐれているところがないからです。
それと私は、差別するのはぜったいにいやです。だって差別すれば『かわいそう』という言葉がふえるからです。……」

「私は関東大震災のことを勉強して、なぜこんなにも人を殺せるのかと思いました。人を殺してしまうということが、そんなにもかんたんかと思うほど何千人という人を殺してしまった日本人。

鶴見に住んでいた朝鮮人は、故大川さんに自分たちの命を助けてくれた石ひを、朝鮮人みんなで建ててくれました。

今日の新聞に、また朝鮮人がいじめられていると書いてありました。ふつうの人が朝鮮人の子どもに向かって、カバンでぶったり首をしめようとしたと書いてありました。私は関東大震災のときと同じことを、また日本人がやりだしたんだと悲しいです。

とってもいい人たちなのに、なぜ、日本人はそんなことをするのでしょう」

ところで、関東大震災当時の朝鮮人に対する差別感、優越感は、七〇年近く経った現在、〝大人の〟日本人の意識から完全にぬぐいさられたのだろうか。

子どもたちは、〝今〟に重なっている本質的な問題をもとらえているようだ。

子どもの柔らかで素直な心は、日本社会の〝歪み〟をも、くっきりとあぶり出してくれる。

子どもがもつ〝知恵〟と〝感性〟から、学ぶことは多い。いろいろな民族が仲良く対等につきあえる、そんな未来を、こういう子どもたちと一緒に創っていけたらいいナ、と思う。

以前ラジオの構成作家をしていたときのことだ。番組で一緒に仕事をしていた高校生の女の子、トモちゃんが、私と会う前に「パク・キョンナム」という名前だけを先に聞き、「どんなに恐い人だろう」と、ハラハラドキドキしていたということをあとで知り、そりゃもうビックリしたことがある。

ところが会って見ると、恐いどころか、メチャクチャ明るくておもしろい人（とだれにでも言われる）だったので、恐怖に震えてた（？）自分をバカバカしく思ったと、トモちゃんは笑いながら話していたが、こっちにしてみたら笑うに笑えないエピソードである。

トモちゃんの女子校では、「韓国人、朝鮮人は恐ろしい人たちよねぇ」というのが、共通の認識だという。

確かに中には気性の激しい人、ケンカの強い人、大声で怒鳴る人などもいるにはいるが、それでもってひとくくりにしてレッテルを貼ってしまうのは幼稚すぎる。人間の世の中、ナニジンにせよ、いろいろな性格の人がいて成り立っているのだから。

話は飛ぶが、先日ある地方自治体の職員を対象に講演する機会があり、あとで送られてきたそのときの感想文の一つを読んで、私の目はまさにテンになった。

「……お話を伺って、在日朝鮮・韓国人も自分たちと同じ人間だということを知りました」

口の悪い私は思わず、その文面へタンカを切ってしまう。

（あったりめぇだろう、そんなこと。いい歳して、いままでそんなこともわからなかったのかい、コンチクショウ）

と言いながら一方で、「まずは一人ずつから」主義の私は、一人でも〝当たり前のこと〟をわかってもらえてヨカッタ、ヨカッタと単純に胸をなでおろしたりもする。

それにしても、私の〝恐怖感〟がいつまでも体内にへばりついているのは、日本人の頭からやはりいつまでも偏見が消えないからではと、思ってしまうのである。

それにしても、かわいそうな状態におき、それだからかわいそうな人間には何をやっても、何を言ってもいいという構図は連綿と現在までつづいているのではなかろうか……。情ケナイコトダケド。

「朝鮮人は自分の国へ帰れ」「朝鮮人はぶっ殺してやる」「あいつら、人間じゃない」……いまでもそんな言葉が日本人の口からもれてくると、また自然災害下で大パニックが起きたらどうなるんだろうと、トモちゃんとは内容が違うが私もハラハラドキドキしてしまう。

埼玉のほうで「外国人にレイプされた女の人がいる」……などのウワサが流れるやいなや、またたく間に千葉、栃木と周辺に広がっていき、簡単に信じこまれてしまう状況や、三Kの仕事は海外からの出稼ぎ労働者が引き受け、日本人はそれを厭う雰囲気が一般的で……となると、時代が進んでも関東大震災時の映像はそのまま。ただ、白黒からカラーに変わっただけかもしれないと思えてならないのだ。

関東大震災時のパニック下では朝鮮人にホコ先が向かったが、それから七〇年も経っているのに、どうやら「加害者」づくりのホコ先は、あまり変わっていない日本の今、のように思えてならない。

レイプ犯人としてうわさになる外国人は、決して欧米系の白色人種ではなく、きまって〝アジア系の外国人〟ということになる。

またそれも、中国人や韓国人のような、見た目が日本人と区別できない国の人間よりも、イラン人、東南アジア系の人たちのように、明らかに日本人と違うといった人たちや日本語のたどたどしい人たちがヤリ玉にあがってしまう。

ここ何年かで日本に住む外国人は目に見えて多くなった。街を歩いていても日常的に見かけるし、ウチの家の前で、作業服姿で下水工事をしている何人かは中東の人だ。そば屋さん

で注文を取りにきた店員さんの日本語がかなりなまっていたりもする。
外国人労働者に門戸を開放する、しないの論議以前に、〝現実〟は確実に現われてきている。
これだけたくさんの外国人がいても、日本の閉鎖性、排他性は変わることなく根強い。
相も変わらず欧米とアジアを見る視線は上下にはっきり分かれる。
私の親しい友人に、ペン・セタリンというカンボジア人女性がいる。一八年前に文部省の国費留学生として来日した彼女は、いまだにイヤな目に合うそうだ。買い物をしようとレジで並んで待っていると、彼女よりあとに来た客のほうを、レジの若い女性は優先した。セタリンがカンボジア人だから、多分順番を守ってないだろうと、頭から疑ってかかっていたからである。
セタリンには、モニカちゃんという小学校二年生になる娘さんが一人いるが、モニカちゃんが保育園に通っていたころ、セタリンが家で声をかけても返事をしないことがあった。
最初はモニカちゃんを叱っていたが、よく聞いてみると保育園の保母さんにこう言われていたのである。
「お母さんが日本語ならいいけど、カンボジア語で話しかけてきたら、返事をしちゃダメ

よ」
日本語を身につけるのに、カンボジア語が邪魔になるから、というわけである。また、小学生になったモニカちゃんの担任の先生は、
「モニカちゃんは、カンボジア人ではなくて、日本人なんだから（?）、いじめないようにね」
とクラスの生徒たちに話したという。
そのせいか、家に友だちを連れてきたモニカちゃんに、「お母さんは顔を出さないで」と言われたりもした。
たとえばモニカちゃんが英語圏、フランス語圏の子どもなら、先生は違う対応をしたに違いない。
どうして、あるがままではいけないのだろう。カンボジアはよくない、アジアの人間は劣っているという発想があるからこそ、モニカちゃんが出会った保母さんや先生のような言葉が生まれてくるのだと思う。
〈?!〉
ヘンな国だ。これだけ世界がボーダレスへと進み、国際化が唱えられているというのに、

日本人の意識は一〇〇年経ってもちっとも変わってないことになるよ。

その人が、あるがままでいられない国って、どう考えてもヘン。

それは大川常吉さんが守り抜いた〝人間の尊厳〟〝人としての誇り〟そのものが奪われていることでもある。人間にとってそれだけは、奪っても奪われてもゼッタイにいけないもの

古い内容そのままで白黒がカラーに変わっただけというのではなく、その画面にいま、登場している一人ひとりが自分のなかにある、人間としての尊厳、誇り（だれにでもちゃんとあるのダ）をしっかり見つけたい。それは同時に自分以外の人たちの尊厳、誇りをも大事に考えられることだと思う。「大川式座標軸」ともいえそうだ。それを磨き合えば、同じ画面に縁あっている人たちと一緒に、どれだけステキないい関係が創っていけるか、どれだけそれぞれが、自分自身としてイキイキと生きていけるか。本当ニ、ソウダヨ。

キョンナム◎朴慶南（パクキョンナム）

作家。鳥取県生まれの在日コリアン二世で、立命館大学文学部を卒業。放送作家やラジオのパーソナリティを経て、執筆活動に入る。本書で「青丘文化奨励賞」を九二年に受賞。他に著書として、本書続編『私の好きな松本さん』『クミョ（ゆめよ）！』『いつか会える』『命さえ忘れなきゃ』『なんとかなるよ、大丈夫』『私以上でもなく、私以下でもない私』などがある。「出会いの素晴らしさ」をテーマに、在日だから見える日本の社会、明日の共生と理解を促進すべく、意欲的に講演活動を行なっている。

三つの大洋、五つの大陸。「三五館」は地球です。

ポッカリ月が出ましたら

一九九二年　八月十五日　初版発行
二〇〇六年　七月二九日　十三刷発行

著　者　キョンナム（朴慶南）
発行者　星山佳須也
発行所　株式会社三五館（さんごかん）
東京都新宿区坂町21　〒160-0002
電　話　03-3226-0035
FAX　03-3226-0170
http://www.sangokan.com/
郵便振替　00120-6-756857

印　刷　モリモト印刷株式会社
製　本　有限会社高地製本所

© 1992 ark Kyungnam Printed in Japan

ISBN4-8 20-002-7

定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は小社負担にてお取り替えいたします。